

大切にしたい価値観や、 ありたい姿から考える 進路選択



高校生価値意識調査(3~11ページ)からは今の高校生の価値観が浮かび上がってきました。その結果を踏まえつつ、数字からは見えない高校生の実態について、NPOや教育行政の立場で現場に関わるカタリバの菅野祐太さんと、全国の高校生と協働しながらメディアづくりをするスタディサプリー進路の仲井美夏編集長に語っていただきました。

——進路選択のあり方について語っていただく前に、まずは自己紹介を兼ね、ご自身のキャリアを教えてください。菅野さんは、教育支援で知られるNPOカタリバからの出向という形で岩手県大槌町の教育委員会に籍を置き、大槌高校にも常駐されているそうですね。

菅野 はい。小学校の先生を志望した時期もありましたが、社会人としてのスタートは東京の企業でした。社会を広く知るために、まず企業人という立場から、と思ひまして。転機は東日本大震災。仕事をしていても、大事な問題を忘れていたような感覚に襲われて手がつかず、無理を言ってつくってもらった休職制度を利用して大槌町へ行きました。カタリバが計画していた放課後学校設立の手伝いをするためです。翌年復職するも、現地のことが頭から離れず、カタリバに転職し、大槌町へ移住。被災地で貧困などの課題に直面したこ

とで教育行政に関わるようになり、学校教育に疑問をもったことで今は高校に常駐しています。それぞれの現場で見つけた課題を解決したい一心で、動き続けているイメージです。

仲井 スタディサプリーの進路に関連する部署で『スタサブ進学マガジン』という雑誌をはじめ、高校生向けの多様なコンテンツを制作しています。多くの高校生にインタビューし、進路以外にも、家族観とか鞆やスマホの中味リサーチなど身近な話題も提供しています。私も転職を2度経験し、最初は編集プロダクションで働いていました。昔から自我が強く、話すことが好きでしたが、逆に聞くことや書くこと中心の仕事がしたかったんです。その後、数字で評価される世界も経験したくなり、まるで違う業界に飛び込みました。数年在籍して結果を出したタイミングで、次の活躍の場を求めた先が今の会社です。



「やりたいことは？」と 問われ続けるプレッシャー

——お二人とも、その時々課題意識によって働く舞台を変えてきたんですね。高校生価値意識調査では、早くにやりたいことを決め、夢や興味を仕事にして成功を目指す“プロ突進タイプ”の増加が顕著でした(8ページ)。頼もしくもありますが、生の声を聞くと、焦りやプレッシャーから「やりたいことはコレ」と自分に言い聞かせている高校生の姿も浮かんできます。「在学中、先生に聞かれて嫌だった言葉」として、「夢は？ やりたいことは？」が上位にくるとい話もあり、圧を感じている高校生も多いのではないのでしょうか？

仲井 やりたいことが見つかった子はいいい

ですが、そうでないとプレッシャーですよ。少し前にあった「好きなことで、生きていく」というYouTubeのCMコピーが典型的ですが、なんとなく一部の若い人の間に、「やっぱ、夢とかやりたいことがないとマズいよな」という強迫観念であったり、それで生きていくことが美德、みたいな世界観ができていているように感じます。

菅野 小さいころから「何になりたい？」と聞かれ続けてきた反動で、思春期になり「別にやりたいこととかないし」と反発する子もいます。でも心の中では焦りを感じていて、進路選択ギリギリのタイミングで、「これでいいや」と決めてしまう。「就職しやすそうだから」「聞いたことのある大学だから」「みんなが行くから」といった理由で、です。

一方で、公認会計士などの専門職を早くか

他者との違いを意識したとき、
ありたい自分が浮かび上がる

「こんな風になりたい」。そう
思い描く理想の姿がありたい自分

認定特定非営利活動法人
カタリバ
大槌町教育専門官
菅野祐太さん

スタディサブリ進路
編集長
仲井美夏さん

なかい・みか 編集プロダクション、テレビ通販会社を経て、2013年リクルート入社。2017年スタディサプリ編集部配属。「いつも高校生の味方となり伴走し続ける」をコンセプトに「スタサブ進学マガジン」(年8回発行)をリニューアル。全国3000人以上のスタサブ高校生エディター組織を立ち上げる。進学マガジンに加え、アプリ「スタディサプリfor SCHOOL」、Webサイト「#高校生なう」、メルマガ、SNSを通じて進路や高校生ライフに関する多彩なコンテンツを発信。

ら目指す目的意識の強い生徒も増えています。思うに、学習指導要領をはじめ、至るところで「変化の激しい時代」「正解はない」と言われますよね。そう言われ続けたら不安になり、少しでも確実性の高いものにすがりたくなる気持ちはわかります。

仲井 目標を早く決めないと、進学にしる就職にしる行動しにくい現実があります。ただ、高校生が、頭の中だけで、やりたいことを見つけるのは難しい。なので、迷っている高校生には「まずは経験してみよう。やってみないと好きかどうかもわかんない」と伝えたいです。

——「本音で相談できる相手がおらず、孤独を感じる」という声も聞きます。

仲井 進路について友達に話しづらい、というのはよく聞く話。「そんな夢、無理に決まってるじゃん」って思われたら嫌だとか。身近な存在だからこそ、話せないことって多いですよね。

菅野 その観点はカタリバもとても大切にしています。活動の原点になっています。親しい関係性において自分をさらけ出すことは難しい。そうしたヨコの関係でも、親や先生などのタテの関係でもなく、利害関係のない少し年上の先輩との“ナナメの関係”であれば素直になれるのではという考えです。

私はワークショップの場でよく、「自分だけが疑問や違和感をもっていると思うことは？」と聞くことがあります。もちろん関係構築ができている安全な場であることが前提ですが。すると例えば「夜、寝るのが不安」などの発言が

一つひとつの選択の積み重ねによって、あなたはつくられているんだと伝えたい



認定特定非営利活動法人カタリバ
大槌町教育専門官

菅野祐太さん

かんの・ゆうた ● 早稲田大学教育学部卒業後リクルートエージェント（現リクルートキャリア）入社。東日本大震災を機に退職し、NPOカタリバが運営する「コラボ・スクール大槌臨学舎」の立ち上げに従事。一時復職するも2013年カタリバに転職し、大槌臨学舎の統括担当に。2017年大槌町教育委員会に出向。2019年よりカリキュラム開発等専門家として大槌高校に常駐。マイプロジェクト、ルールメイキングプロジェクトにも関わる。文部科学省コミュニティ・スクールの在り方等に関する検討会議委員。



出てきます。「話してくれてありがとう。では、同じことを気にしてた人は？」と聞くと何人も手が上がります。自分だけが悩んでいたわけではないことがわかり、少しほっとした表情をします。そこで、こう付け加えます。「みんなも悩んでいるってことは、あなたはその悩みの代表。それについて探究を深めれば、社会課題を解決することに繋がるかもしれないよ」と。

世代で一括りにせず 環境と人柄を分けて考える

——仲井さんはZ世代と呼ばれる今の高校生の特徴をどう捉えていますか？

仲井 編集部では「人生相談したい有名人ランキング」といったカジュアルなテーマを含め、毎月千人規模のアンケートを実施しています。でもニュースの見出しになるような尖ったコメントは少数で、地に足の着いた回答がほとんどです。また、記事制作に協力してくれる3千人の高校生エディターに、どのような協力が可能か登録時に聞くのですが、誌面に登場したい高校生は2割もいなく、アンケート協力でこっそり参加したい、という子が最も多いんです。友達の目を気にしているのかもしれないね。

菅野 カタリバの活動でも「友達に真面目とか意識高いと思われたくない」という発言はよく聞きます。関係性の中での自分の立ち位置が気になるのです。昔から同調圧力ってありましたが、今はSNSなどを通じて学校の外でも繋がっている状態なので、人間関係に苦慮する

あなただけがもつ視点を大切に、
社会との対話をし続けてほしい

生徒は多いと感じます。

仲井 趣味垢、リア垢、ROM垢など複数のアカウントでキャラを使いわけるとSNSをうまく活用している子はいます。ただSNSのタイプによってはネガティブな情報が流れやすいものもあり、よくない影響を受けやすい面も確かにあるかなと。記事でメンタルコントロールを取り上げたときは、読者からの反響が多くて驚きました。

あと、デジタルネイティブと呼ばれるだけあって画面から情報を得るスキルは本当に高い。例えば、ウェブオープンキャンパスの視聴中、動画配信を準備する教職員のふとした会話から仲の良さや校風を感じとったり、スライドのフォントの大きさなどから自分たち高校生への配慮を汲み取ったりと、大人がリアルな場で感じることを、ネット上でキャッチしているわけです。

こうしたZ世代特有の環境はありますが、メディアで喧伝されるような問題意識が高く社交的な高校生は、ごく一部の目立つ層。なので世代で一括りにせず、これまで通り、対一の関係で接し、こちらの思いも素直に伝えることが大切だと思います。むしろ、思いを汲み取る力は、総じて強いので。

菅野 学校でも「この学年は」など一括りにする言葉を使いがちですね。そういう空気が強い組織では、個が集団に埋没しがち。なのでカタリバが実施するマイプロジェクトという探究学習では、文字通り“マイ”を大切にしています。「あなたにしかない感性」や「あなただから感じる違和感」を大切にすることで探究は深まり、自分自身を見つめ直すことにもなりますから。

私がそれを強く意識するようになったのは被災地での生徒の振る舞いでした。マイクを向

けられたら「絆」、将来の夢は、という質問には「復興に貢献したい」が求められる答え。マイプロジェクトのテーマも、大人の願いが投影されたようなものが少なくありませんでした。でも聞くと本音は別のところにあるんです。絆という言葉が大嫌いと言った生徒もいました。これはマズい。もっと自分を出していいんだよ、と語りかける必要があると感じました。

先生の言葉の重みと 選択することの重要性

——そうした高校生と接するうえで気をつけていることはありますか？

仲井 高校生にとって大人は、強い影響力をもっています。大人の何気ない発言や態度によって、言いたいことも言えなくなってしまう。なので私は、聞くことを大切にしています。自分を知らうとしてくれない大人に、どんな言葉をかけられても響きはしませんから。

＼ PICK UP /

カタリバの主な活動

●出張授業カタリ場

全国の高校生を対象に、学生のボランティアスタッフが中心となって約2時間本音で語り合う授業。ナナメの関係と呼ばれる大学生や社会人との対話や出会いを通して、価値観に気づいたり、新たな自分を発見したり、探究したいテーマを設定したりする。(2020年以降、新型コロナ感染拡大防止のため新規受付を休止中)

●全国高校生マイプロジェクト

身の回りの課題や関心をテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通して学ぶ実践型探究学習プログラム。小さくても実際に行動を起こすアクションや、主体性を重視。カタリバ主催で毎年、「全国高校生マイプロジェクトアワード」を開催。

●みんなのルールメイキングプロジェクト

校則やルールに対して、生徒が主体となり、関係者との対話を重ね納得解をつくることを通して、課題発見、合意形成、意思決定する力を高める。2019年に2校から始まった取組だが、社会的な関心が高まり全国に広がる。経済産業省「未来の教室」実証事業。

菅野 完璧に見えるロールモデルに高校生は親近感をもちにくい。「この人にも失敗や苦労があって、今があるんだな」と知って初めて憧れは生じます。だからこそカタリバの活動で高校生と話す際には、挫折も含めた等身大の自分を高校生にぶつけます。学校の先生は構造上、正しいことを言うべきという立場になってしまいがちなので、もっとカッコ悪い部分を見せてもいいのではと感じます。

仲井 先生の影響力和いえば、最近知ったことがあります。私は中高一貫校育ちで、そのまま系列の大学に上がるのが自然な進路だったんですが、「10年間同じ学校にいるってどうなのか」と疑問を抱き、他大学を受験したんです。猛反対していた親が受験を認めてくれたのは高3の11月でした。先日、父に「あれだけ反対してたのに、なぜ急に認めてくれたの？」と聞いたところ、「担任の先生に、『このままだと娘さんに一生恨まれますよ』と言われたから」と。それを聞いてまず感じたのは、先生の言葉って重みがあるんだなということ。そして、「あの先生、私の味方になってくれてたんだ」ということ。当時は「この先生、人に興味があるのかな」と思っただけに、胸に刺さりました。

菅野 私の転機も高校時代でした。「進学校な

んだし、部活なんてほどほどにやればいいんだよ」という空気が支配的ななか、「違うだろ。みんなで決めたんだからしっかりやろう」と口にした体験です。ベンチ要員だった私に、顧問が「菅野、お前はと思うんだ」と投げかけてくれたことがきっかけでした。その結果、新たに主将になり目標としていた大会に出場することができました。そうした経験から、他者とは違う自分の存在に気づけたことが、その後のさまざまな選択の場面において、「自分はこう思う」と自信をもてる基盤になっています。

仲井 自分で決めた事実があれば、他責になりませんよね。実は私の他大学受験はうまくいかず、結局内部推薦で進学したのですが、充実した学生生活を送れたのは、自分がした選択の結果だったからです。もしそうでなければ、うまくいかないことがあるたび「あの時こうだったら!」とタラレバで考えてしまっていたかもしれません。大切なのは、自分で選択したという事実。なので、もし生徒が、首を傾げなくなる選択をしたとしても、頭ごなしに否定しないことと、「そうした選択の積み重ねによって、あなたはつくられているんだよ」って伝えることも大切だと思います。

菅野 選択が正しいかどうかなど、わかりませ



高校生向けメディアをつくるスタサブ編集部メンバーは30代がメイン。高校生のトレンドを知るため、例えば最新のプリントシール機を編集メンバーと体験することも。「顔のデフォルト加工やプリ機のデザインからビジュアルのヒントを得て誌面のデザインに活かしています」と仲井編集長。受験期はメンバーの皆と合格祈願へ。(写真上)

んからね。話は少し飛びますが、岩手県の高校には校歌・応援歌練習という伝統があります。先輩の厳しい指導の下、喉が枯れるまで全員で歌うのですが、ある生徒から、活動の見直しが提案されました。検討委員会において廃止を求める意見が多数を占めるなか、最終的な決断は、「校歌の練習は残す。けれど厳しい指導は行わない」に。どんな経緯があったかという、発議者の生徒が校歌の意義を改めて調べたところ、熊本地震の際にコミュニティラジオで校歌のリクエストが多くあったことを知り、「自分にとっては否定的に感じられることが、誰かの心の支えになることもある」と気づきます。議論に新たな視点が生まれたのです。このエピソードを今回の対談のテーマに合わせると、こうでしょうか。社会では、「自分はこうしたい、だからあなたも認めてよ」とはいきません。自分はこうしたいけど、違う考えをもつ人もいる。では改めて自分はどうすべきか。その視点をもったとき、自分のありたい姿が浮かび上がると思うのです。なので社会と自分との視点の行き来がとても重要。マイプロジェクトも、周りの人との違いをぶつける体験を通じて、自分がどういう存在かを問う機会でもあるんです。

自己に対する理解や気づきで 浮かび上がる、ありたい姿

——今までのお話から、目標を見つけることも重要ですが、自分はどうありたいのかなど、内面を見つめ直すことが、進路指導では大切だと感じました。

仲井 そう思います。ただ、「どうありたいか」というストレートな問いは高校生には高尚過ぎる

のでは。大学生でも就活中、延々と「自分探し」をしてる人がいますが、あの迷路に入ってしまうそう。そもそも、問われると、答えをつくらなきゃって思考になると思います。

菅野 確かに「やりたいことは？」の圧に代わり、「どうありたいか？」という新たな圧にしてはいけません。私としては先ほど話したことに加え、「自分はどういうときに喜び、違和感を覚えるか」ということを認識したり、「他者と違う視点をもっていていいんだ」と納得したりする。その時点で、ありたい姿が見え始めている気がします。

仲井 どんな人にも、自分の内側に受け容れ難い部分があると思うんです。考え方だったり、振る舞いだったり。本人がそれを変えたいと思っていて、こう変わりたいと思いつく理想像があるとしたら、それがありたい自分ではないでしょうか。そうした気づきを促すコミュニケーションが大事だと思います。

菅野 そう考えると、よく聞く「今のあなたでいいんだよ」というフレーズは使い方に気をつけないといけませんね。今日までのあなたは肯定していても、そこから変わっていかうとするあなたまでは対象にしていませんから。言葉狩りになってはいけませんが、私個人は、変わろうとするあなたも、肯定する必要があると思っています。

仲井 確かにそうですね。最後、高校生には改めて、「将来について考えを巡らすことは大切だけど、行動あってこそ考えは深まる」と伝えたいです。まずは、動き、少しだけ外の世界に触れてみる。そうすることで自己理解の解像度を上げ、本当の「やりたいこと」を見つけてほしいし、それが変わっていく過程も含めて人生を楽しんでほしいです。